

真宗伝道一考

蓮如における伝道手法

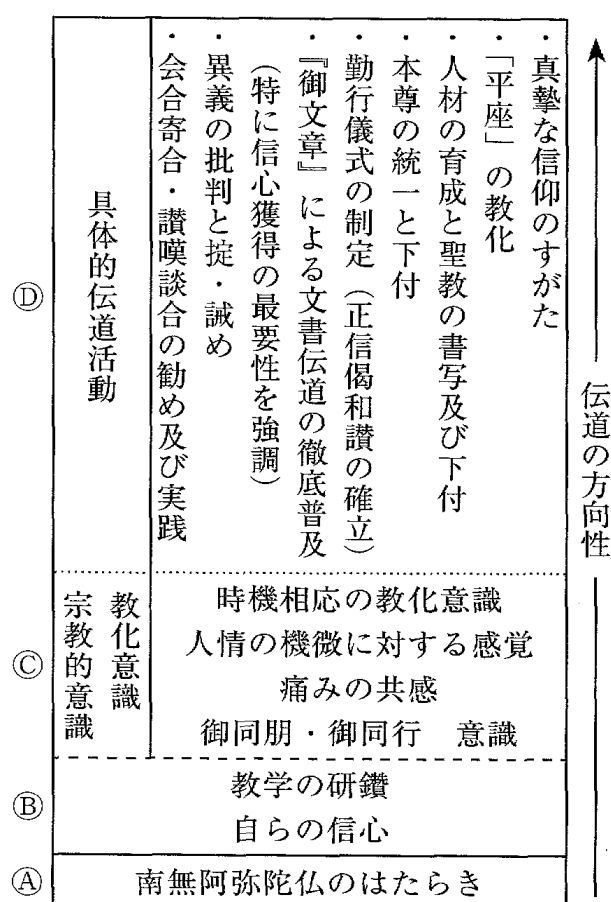
長尾隆司

九四

はじめに

「名ばかりの門徒、形ばかりの僧侶」と言われて久しい。それは今日に至っても何一つ変わっていないのではないか。何よりも「本当のこと」が伝えられていないように感じられる。今回は、本願寺第八代宗主蓮如の伝道手法について再確認していくのであるが、周知のように、蓮如の時代に、本願寺門徒が、特に、爆発的に増えたという歴史的事実を考えると、何かしら人々を引き付けるものが、蓮如の行なった伝道手法にあったと推測される。それは「人情の機微を察しつつ、本気で、真剣に、〈本当のこと〉を伝えた」ということであると考えられる。このことは、今、浄土真宗の教えを伝えるに当たり、最も、強烈に、意識されなければならないことではないかと思われる。

なお、蓮如における伝道手法をまとめると、次に挙げる図表のように示すことができるであろう。



一 伝道の前段階

蓮如における伝道の前段階（図表①②③）とでもいうことを、以下に二点ほど見ておきたいと思う。

第一に、自らの信心である。『御文章』二帖目第一五通に、

「肝要は、ただわが一宗の安心をよくたくはへて、自身も決定し人をも勸化すべきばかりなり。」とあり、その他『御文章』には数多く信心について示されてある。また『蓮如上人御一代記聞書』（以下『聞書』と略）にも「教化するひと、まづ信心をよく決定して、そのうへにて聖教をよみかたらば、きくひとと信をとるべし。」（『聞書』一四）、「信もなくて、人に信をとられよとられよと申すは、われは物をもたずして人に物をとらすべきといふの心なり。」（『聞書』九三）などとある。

これは「信心がなければ伝道してはならない」ということではなく、「教化はもちろん大切であるが、その前に、まず自らの〈生死出づべき道〉を見定めることが先決である」ということを焦点として述べていると見ることができ。この背景に、自らの出離生死は全く問題にせず単に説教し、あるいはそれを経済活動目的としている者があったことが推測される（現代においては、「説教すらされていない」という状況があるようにも感じられる）。そのような状況の中で、「まず一番大事なことは自分自身の後生の一大事を明確にすることであるぞ」と注意していったのであろう。

第二に、教学の研鑽である。「伝道」と言うと、どこか僧侶の専売特許のようなイメージを抱きがちであるが、すべての者が南無阿弥陀仏のはたらきにより平等に救われるという教義から考えると、僧侶だけが伝道者ではなく、門徒衆

も伝道者であるという性格を持っている。それは「自信教人信」の語が指し示していることでもあろう。では僧俗の異なりは何であるかといえば、「自ら信じ、人にも信を勧めつつも、より専門的に学び、きちんとした理論背景を踏まえて、教えを伝えることに専従する」ということであろう。よって理論的なものをきちんと押さえるにも、当然、教学の研鑽が必要となってくる。むしろこれがなければ、僧侶である必要はないのではないか。

蓮如における修学の努力は並外れたものがあつたようで、『天正三年記』などによると、『教行証文類』や『六要鈔』などは常に参照し、また『安心決定鈔』は数部読み破り、父存如にも法義を尋ね学んだようである。また灯明の油がないときは黒木を焼いて灯りをとって聖教などを読み、月夜には月の光で勉強に励むなど、文字通り螢雪の功を積み、苦学勉強したと伝えられる。こうした聖教の学問研鑽が布教伝道活動において、言動の支えとなつたであろうことは言うまでもない。このような、聖教に対する不断の修学の上で、親鸞一流のおもむきを伝えたのであり、そうした姿勢が、蓮如の生涯終始貫き通されたのである。

二 蓮如の伝道における特徴

蓮如の伝道における特徴について考えてみると、南無阿弥

陀仏のはたらき(図表Ⅰ④)を根本とし、そのはたらきが衆生(蓮如)の心ではたらいっている相が信心であり、その上で、信心に付随するかたちで教学の研鑽ということが考えられる(図表Ⅰ⑤)。そして、その南無阿弥陀仏のはたらきが伝道活動の方向へと向かい、宗教的意識・教化意識(図表Ⅰ⑥)から具体的な伝道活動(図表Ⅰ⑦)へと展開していく。すなわち、「一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ。」(『聞書』一二二)という、蓮如における「伝道の基本理念・目的意識」とでも言うべき意識と、「共に南無阿弥陀仏によつて救われる凡夫なのである」という共感・同朋精神と、そこからあらわれてくる人情の機微に対する感覚、またそれに通ずるであろう時機相応の教化意識ということから、具体的な教化がなされていくのである。

何よりも、親鸞の教えに誠実であろうとし、衣食住のすべてが仏法領の物(如来・親鸞の御用)であるとし(『聞書』一六九等)、つねに「冥加」を語る(『聞書』七八等)、報恩謝徳の念仏生活にあらわされた真摯な信仰のすがたがあった。平座にて親しく民衆に接して、さまざまな悩みを抱えた一人の人間として、悩める人々と膝をつきあわせて、じかに仏法を語り合い(『聞書』四〇等)、よしみを深める大きな助力となる酒食や(『聞書』二九五等)、法座の運営(『聞書』一一七等)

などにも、細やかな配慮をしたのであった。しかし、ときには厳然と門徒衆に臨んだこともあり、寄合が飲み食いに重きがおかれて、仏法聴聞・讃嘆談合が疎かになっていることを厳しく批判する(『御文章』四一一二)など、締めるときには締めるという態度をとった。蓮如の接し方や態度、細やかな気配りは、当時の民衆の琴線に触れ、何よりも人々は大いに感動したことと思われる。これら、言わば「柔」と「剛」の態度が相まってより人々の心をとらえたものと推測される。

そして、親鸞の教えの肝要は「信心をもつて本とせられ候ふ」(『御文章』五一一〇)と言い切り、「信心正因・称名報恩」の宗義を説くことを中心として信心を統一し、教えを平易な言葉で語り、本尊や、仏前の勤行様式を初めとする統一的な宗教儀礼を確立することによって、名実ともに本願寺教団が確立していったわけである。

しかしそのためには、信心の異なる者を導いて、正しい法義に基づく信心を獲得せしめていくための強力な教化活動が展開されねばならなかった。『御文章』や法語類を見ると、真宗の内部で、親鸞の流れに背くものは、どんなに勢力をもっている大坊主であれ、有力門徒であれ、身内のものであれ、真っ向から容赦なく徹底的に批判して改悔・懺悔を迫っていったことがわかる。もつとも、世俗の政治権力を攻撃目標としたわけではなかったし、天台宗をはじめとする寺社勢力

と敵対することもかたく禁止していた。そのことは、諸種の掟や誠めの言葉によつて確かめることができる。鎮西派や西山派など浄土系の余流に対しても、真宗との違いを明らかにすることはあつても、決して誹謗してはならないと言ひ、また高田派や仏光寺派など、真宗の諸派に対しても、異義として直接批判したりするというようなこともなかったのである。蓮如が、厳しく批判し、正そうとしたのは、本願寺の門徒でありながら、親鸞の宗義を知らないために、浄土異流の信仰を真宗の信心と誤解している、「親鸞聖人の御流にそむく」僧侶や在俗の信者の異義であつた。異義を許すことは、仏祖に背を向けることであり、正しい教法を護持することを目的としている教団の存在意味を切り崩すことになったからである。不拝秘事とか、即身成仏（一益法門）の秘事といわれるような秘事法門をはじめ、知識帰命、十劫安心、無帰命安心、無信单称、自力念仏、物とり信心、施物だのみ、現世祈禱など、真宗の道俗の中にはびこっていたさまざまな異義を肅正し、浄土真宗の真実義に回心せしめようとした。

そして更には、寄合・談合を勧めることによって、宗義に適った安心の確認をなさしめたのである。

これらを総じて、「ただ単にほんやりと信仰する者」ではなく、「意識的な、浄土真宗の念仏者」を育てていったのであると考えられる。

おわりに

以上、蓮如における伝道手法を考えてきた。南無阿弥陀仏のはたらきを根本とし、教学に裏打ちされた、言説を伴う、真摯な信仰のすがたと厳しさ。権威的・教条的押しつけではなく、共に南無阿弥陀仏によつて救われる凡夫なのであるという共感・同朋精神と、そこからあらわれてくる人情の機微に対する感覚の鋭さ。これら「知」と「情」のバランスによつて、「本当のこと」が伝えられ、そして念仏をよろこぶ人々を数多く育てていったのである。

また、時機に迎合するのではなく、ときには厳しい態度をもつて門徒衆に接したことは注意しなければならないだろう。甚だ主観的ではあるが、現代においては、「人集めのための手だて」にばかり関心が集中し、真の目的である「信心」が忘れ去られているのではないか。「寺に人が来さえすればそれで良い」という風潮が少なからずあるように感じられる。

「一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ。」という言葉を肝に銘ずるべきである。

〈キーワード〉 蓮如、『御文章』、『蓮如上人御一代記聞書』、伝道

（龍谷大学大学院博士後期課程）